愛知県立大学研究ダイジェスト

Re:Birth 2026

in SEARCH of COLLABORATIVE RESEARCH

インタビュー

研究と批評の間に橋を架けた
「詩人・鮎川信夫」を照らす美しき一書。
『鮎川信夫と戦後詩 ―「非論理」の美学』…… 1

依存症と自殺リスク研究の新たな視点、
「いじめ被害」の見えざる接点を解析。…… 2

5つの学部で輝く研究 …… 3
外国語学部 ／ 日本文化学部 ／教育福祉学部
看護学部 ／ 情報科学部

研究所・プロジェクトチーム活動報告 …… 5
ICTテクノポリス研究所 ／ 次世代ロボット研究所 ／
生涯発達研究所 ／ 多文化共生研究所 ／
人間の尊厳と平和のための人文社会研究所 ／
文化財調査活用総合研究所 ／
地域コミュニティにおける高齢者の介護予防・孤立防止を
目的としたニューノーマルな時代の「遊び」開発プロジェクト

2025年度科研費新規採択一覧／学長特別研究費一覧 6

研究と批評の間に橋を架けた「詩人・鮎川信夫」を照らす美しき一書。『鮎川信夫と戦後詩 —「非論理」の美学』（琥珀書房 2024.10）

宮崎真素美（みやざき ますみ）

日本文化学部 国語国文学科 教授

1992年3月筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科単位取得満期退学。同年4月、本学文学部着任。専門は日本近代文学。博士(文学)。単著に、『戦争のなかの詩人たち—「荒地」のまなざし』(学術出版会2012年)、『鮎川信夫研究—精神の架橋—』(日本図書センター2002年)、『詩誌『詩学』の世界/初期『詩学』復刻版』(琥珀書房2025年)。共著に、『言葉の文明開化—継承と変容 —』(学術出版会2007年)。編著に、『コレクション・都市モダニズム詩誌30戦後詩への架橋II』(ゆまに書房2014年)、『コレクション・都市モダニズム詩誌13アルクイユクラブの構想』(ゆまに書房2010年)など。

実作者の多い歴史ある団体 日本詩人クラブ詩界賞を受賞。

— ご受賞おめでとうございます。ご感想をお聞かせください。

宮崎： ありがとうございます。まったく思いもよらないことでした。本書は40年ほど続けてきた研究のひとつの結実ですが、いわゆる研究者中心の機関における賞ではなく、実作者の方の多い、そして、由緒ある日本詩人クラブが授けてくださったのは本当に嬉しいことでした。

研究と批評の間には、いつもどこか隔たりがあって、研究は堅牢に、批評は自由度高く、という棲み分けがあるように感じてきました。ですから今回、「研究」という分野の仕事を、詩人・批評家の方々が受けとめてくださり、専門の枠を超えて認めてくださったことが私にとっては特別でした。

— 受賞の決め手となった要素は？

宮崎： これまでにいただいた書評から考えますと、共通していますのは、詩作品の「掬い方」と「実証」といった両輪のバランスを評価いただいたことでしょうか。

装幀も各所で好評をいただきました。真っ白なカバーにブルーグレーの本体で、題字の書体も独自にご作成くださいました。細かな部分にまで心を砕き、本書の世界観をみごとに表現してくださいました。編集者と、デザイナーと、私との「三人の作品」だと思っています。

この装幀を元に、愛知県立芸術大学のデザイン専攻ゼミと、私の近代文学ゼミとが、本書の編集者とデザイナーを招いて、合同で考察する機会も持ちました。ここで初めて明かされた話もあり、細部にわたる分析をいただけたのは、おもしろく得がたい機会でした。また、わざわざ購入して読んでくださった本学職員の方からは、装幀・内容ともども「いざないのある本」とのお言葉をいただき、とても嬉しく思いました。

— 大学の学長特別研究費の採択については？

宮崎： たいへんありがたいことでした。装幀に手をかけられたのも、そのおかげです。感謝しています。出来上がった本を最初にお届けしたのは、学長です。すぐにお読みくださいましたので、受賞を報告した際にもご自身の読後感を交えて、「広く一般に開かれたところで受賞した意味は大きいですね」と喜んでくださいました。

論理の人の破れ目から垣間見える柔らかな詩情と現代への問いとは。

— 今回の著書ではどこに主題を据えましたか？

宮崎： 鮎川信夫は戦後詩の旗手と言われた、「荒地」グループの中心的存在で、論客として知られた人です。詩も書くけれど、詩評論に卓抜の才を持ち、論理的で、ある種いかめしい創作ペルソナを持っている。だから多くの読み手は、彼の詩作品と詩論との整合性を求めがちで、詩作品を詩論に還元して読んでいく方向に寄りやすかったんです。

でも私は、「なぜ詩を書いたのか」というところを考えたいと思ったのです。詩論だけでは表現しきれないものがあったに違いない、と。読んでいくと、論理がひび割れるような「破れ目」があり、そこから柔らかな詩の感覚が立ち上がる。「詩人・鮎川信夫」をしっかり照らしたい、それが今回の核です。

— この視点は現代にも通じますか。

宮崎： 敗戦後ほどなく発表された鮎川の詩「アメリカ」（1947年）は、それに付された「「アメリカ」に関する覚書」とともに、断片をコラージュし、「一つの中心」、「生の中心」なるものを求めてゆこうとします。けれども、それを確たるものとしては言い当てず、言葉を漂流物のように浮かせたまま余白を残しています。現代は直線的なわかりやすさを求める方向に社会が傾きがちですが、ものごとは本来多層かつ多様で、簡単に「一」には収まらない。だからこそ、中心を言い当て、静止させるよりも、中心を夢想し続ける動態的なあり方が重要であると思うのです。

— 研究の中でご苦労された点と、今後の展望は？

宮崎： 苦労と感じることは全くありません。研究は「勉強」とは違い、楽しみであり、うまくいかないことさえも、「なぜうまくいかないのか」という新しい問いを与えてくれます。他者が自分の鏡であるように、文学作品もまた、読む自分自身を映し出す鏡となります。

学生たちからも、ふとした反応や言葉の反射から、たくさんのことを教えてもらっています。私から伝えているのは、「居ずまいを正す」ことの大切さです。作品に対しても研究に対しても、まず敬意を持って向き合うこと。その上で先行研究をスプリングボードにして「超えていってほしい」のです。研究は、どこまでも超えていくものだと思いますから。

今後は、講義をもとに展開してきた論考を、長らく私を育んでくれた本学に、「ありがとうございました」の思いを込めてまとめることができれば、とは考えています。けれども今は、これまでに出会って、いろいろなことがらを手渡してくださったひとたちに、この本を、今度は私から感謝とともに手渡したい、そんな気持ちでいます。そして、まだ見ぬ方々がこの本をとおして、本学の研究の一端にふれていただけるのなら、それはとても幸せなこと、と思っています。

依存症と自殺リスク研究の新たな視点、「いじめ被害」の見えざる接点を解析。

菊地 創（きくち そう）

教育福祉学部教育発達学科 講師

心理学者/博士(心理学:中央大学) 専門は臨床心理学。児童の抑うつと家族関係に関する研究で博士号を取得。その他に物質使用障害や発達障害に対する臨床心理学的支援の方法についても研究を行う。また、研究と並行し、臨床心理士・公認心理師として臨床実践にも従事。

若手研究者の登竜門「小杉好弘記念賞」。

— 第47回日本アルコール関連問題学会「第14回小杉好弘記念賞」ご受賞おめでとうございます。この賞はどのような位置づけでしょうか。

菊地： ありがとうございます。この賞は、主にアルコールや薬物関連の依存症に関する研究領域において、学術的および社会・地域貢献を評価するもので、依存症の研究や臨床に携わる若手の登竜門的な賞だと認識しています。45歳以下が対象なのですが、35歳と比較的早いタイミングでの受賞となり、正直、驚きが大きかったです。

— 受賞研究テーマ「物質使用症者における自殺未遂の経験とその関連要因：いじめ被害経験を含めた検討」を始めたきっかけは？

菊地： 依存症の方たちは、世間では「意志の弱さ」「自分勝手さ」から依存に至ると思われがちですが、依存に至る一番の背景要因は「なんらかの苦しい経験や傷つき経験」を抱えているということです。

従来の研究では、小児期の逆境体験（ACE）といえば、親からの虐待やネグレクトなど「家庭の中での出来事の被害経験」に焦点が当てられることが多かったんですね。ですが、私は教育・子どもに関する実践・研究をしてきた中で、家庭内だけでなく、子どもにとって一番大きな社会である学校での傷つき体験、特にいじめ被害が後の影響として非常に大きいのではないかと感じていました。これまでの依存症の逆境体験研究には学校の要因があまり含まれていないという問題意識から、本研究に取り組みました。

調査で明らかになった依存症といじめとの関連。

— 調査結果で特に印象的だった点は？

菊地： 調査実施に際して、薬物依存症回復施設55施設に協力いただき172名の方から自殺未遂経験やいじめ・虐待被害経験等のデータを得ることができました。

そのデータを統計解析した結果、20%以上の方が自殺未遂経験を持っていました。依存症の方々は、世間の人が思う以上に自殺のリスクがすごく高い。さらにいじめ被害を経験している人は、経験していない人に比べて自殺未遂のリスクが非常に高くなっていました。

当初の想定では、家庭内での虐待等の影響が大きく、いじめはその次くらいだろうと予想していたので、「虐待等よりも、むしろいじめの方が影響が大きい」ということに衝撃を受けました。

この結果は、支援の現場において依存症の方のアセスメント（評価）を行う段階で「いじめ被害経験」という視点を積極的に取り入れることが、自殺リスクの早期把握・予防に役立つ可能性を示唆しています。

— 本研究は様々な分野や立場によるチーム体制で進められたと伺いました。

菊地： はい。もともとは他大学の共同研究者の先生と始めた研究ですが、研究者だけでは"研究のための研究"になってしまいがちです。私は「片手に理論、片手に実践」をポリシーに、現場での課題を研究によって明らかにし、そこで得られた知見を実践に還元するということを繰り返してきました。ですから、今回の調査でも、現場で働く人や当事者の感覚とずれてしまうことを避けるため、共同研究者の先生と相談して実際に診療にあたっている精神科医、臨床心理士、そして依存症回復施設『ダルク』のスタッフ等にチームに入っていただきました。

— 現場の参加はどのような強みになりましたか？

菊地： 当事者の方々にとってアンケートに答えること自体のメリットは多くないため、意欲的に回答をしてもらうことは容易ではありません。そこでダルクスタッフの方からの「この項目は答えにくい」「設問が長すぎる」といった当事者の感覚に基づいた意見を取り入れ、アンケートを設計しました。また、精神科医の先生方には、医療的視点からの助言をいただくなど、チームの複合的な視点がこの研究の信頼性を高めたと思っています。

社会問題とも向き合い、研究と実践の架け橋に。

—今後の研究課題は？

菊地： 今後はより臨床的な研究を進めたいです。現在の依存症治療の中心である認知行動療法に基づく集団プログラムに加えて、もう少しコンパクトなものや自助グループとうまく接続していくようなプログラムを作れたらと考えています。

具体的には、新たに海外で注目されている「マインドフルネスに基づく依存症向け再発予防プログラム（MBRP）」に可能性を感じています。私自身が体験したところ、従来のプログラムよりも「共に回復していく」というプログラム参加者同士の仲間意識の高まりや、孤立感をなくしていく感覚が強く感じられました。通い続ける負担が大きいと途中で支援機関との関係が途切れやすいので、内容を凝縮しつつ、自助グループとも自然につながる導線をつくるなど、日本の実情に合うようにチューンナップしていきたいです。

—研究者として目指していることは？

菊地： 基礎研究も重要ですが、研究と臨床、研究と社会を繋いでいくのが、私のような研究と臨床を両足でやっている人間の役割だと感じています。依存症や自殺といった社会課題に向き合いながら、私ができる範囲は小さな研究かもしれませんが、その積み重ねでこの社会と研究の間の「小さな架け橋の一部になっていけたら」と願っています。

5つの学部で輝く研究

外国語学部

佐野 直子
外国語学部
ヨーロッパ学科　教授

I　南仏の少数言語、オクシタン語

南フランスには、フランス語とは異なるロマンス語が話されています。この言語は古くからの威信ある文学語ですが、フランスにその言語領域が徐々に併合される過程で、「言語」の名に値しない「崩れたことば」とみなされ、近代化の過程で滅びるべきとされました。しかし話者たちは、この言語を失わせまいと、さまざまな保護運動を展開します。このことばを「言語」として名指し、書き留め、文学活動を行い、子どもへのイマージョン教育や社会人教育を展開し、メディアやフェスティバルなどで使用し続けました。中央集権国家フランスの抑圧的な言語政策のもとで、何世紀もの間、消滅の危機に瀕し続けつつ、今なお生き延びているのです。

II　「危機に瀕する言語」の社会言語学

消滅の危機に瀕している言語は、オクシタン語に限らず、日本にも、世界中にも数多く存在しています。それらの言語が失われる前にその体系を記述しようとする言語学研究に対して、社会言語学は、話者たちがどのようにその言語を捉え、どのように学び、使用するのか、という社会的な側面に注目します。私も、この言語を自ら選択して獲得した「ニュースピーカー」の一人として、誰と、いつ、この言語を使用できるかというフィールドワーク調査と、この言語がどのように名指されてきたのか、という歴史社会言語学の研究をしてきました。

III　カントルーブの民謡収集と作曲活動

現在は、フランスの作曲家J.カントルーブ（1879-1957）についての研究に着手しました。カントルーブは、フランスでは珍しく、自ら民謡を収集し、その歌詞をそのまま使用した歌曲の作曲家で、代表作『オーヴェルニュの歌』は今なお世界中で演奏される名曲です。しかしその歌詞がオクシタン語の一変種であるために、読み方や意味がわからないことが、実演における問題となっていました。20世紀初頭のオクシタン語保護活動とカントルーブとの関係、その表記の特徴などについて、カントルーブの残した文書を元に研究を進めています。

看護学部

黒田 喜幸
看護学部
看護学科　講師

I　看護師だけど生化学や分子生物学の研究

私は、本学看護学部の前身である愛知県立看護大学の卒業生です。卒業研究がきっかけで生化学や分子生物学の研究に興味を持ち、看護学から外れた経歴を辿ってきましたが、巡り巡って自分の原点に戻ってきました。現在は、私の恩師である米田雅彦先生（本学名誉教授）が、長い年月をかけて築いた研究設備を引き継いで研究をしています。細胞培養、遺伝子解析、タンパク質分析など、生化学や分子生物学の一通りの実験が行える環境が整っており、他の看護学部ではあまり見かけない、非常に珍しい研究室になっています。

II　高齢者の皮膚はなぜ損傷しやすいのか？

高齢の皮膚は若年者と比べて脆弱で、少しの力で剥離して損傷することがあります。また、臥床時間が長くなると褥瘡（床ずれ）が発生しやすく、創傷治癒にも時間を要します。皮膚をはじめ、私たちの組織は細胞の集まりで形成されていますが、細胞どうしはコラーゲンやヒアルロン酸などの細胞外マトリックス分子を足場として集合しています。そのため、細胞外マトリックス分子の質や量の変化が、加齢による皮膚の脆弱性や創傷治癒に関与していると考えられます。現在、臨床の皮膚科医との共同研究を進めており、分子・細胞レベルでの解析を通して、高齢者の皮膚や創傷治癒のケアに貢献していきたいと考えています。

III　今後の目標

私が専門とする生命科学や基礎医学の分野の研究は、複数名で構成される研究室で行われています。私個人が行う実験だけでは、成果が出るまでに途方もない時間がかかります。そのため、先に紹介した皮膚科医との共同研究だけでなく、眼科医との共同研究で眼の病態生理に関する研究も実施しています。現在は医学分野の共同研究が主体ですが、私の生化学や分子生物学の知識や技術が役立つことがあれば、今後も分野を問わずに共同研究を行い、社会や学術に貢献できる研究をしていきたいと考えています。

日本文化学部

大川 孔明
日本文化学部
国語国文学科　講師

I　日本語の文体史研究

私は日本語の文体史研究を専門としています。ここでいう「文体」は、ある資料や文章の集合に一貫して見られる言語上の特徴を指します。たとえば、平安時代であれば、『源氏物語』や『枕草子』などの王朝文学がありますが、そこでは「あるいは」「あらかじめ」のかわりに「あるは」「かねて」が使われます。一方同じ時代の『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』という漢文訓読文資料では、「あるいは」「あらかじめ」が使われています。これはたまたまではなく、それぞれの文章にとってふさわしい語が選ばれた結果です。

II　文体の範疇と類型性

では、なぜそれがたまたまではないと言えるのでしょうか。その理由には、それぞれの出自が異なることと、今挙げた語だけでなく、非常に多くの語において、王朝文学＝和文に偏って用いられたり、漢文訓読文に偏って用いられたりすることが挙げられます。こうした言葉の使い分けの集積によって文体が形作られます。さて、このように和文の文体、漢文訓読文の文体があることは分かりますが、その境界線はあいまいですし、それぞれに属すると推定される資料がはたして文体的に等価値であるかというとそうではありません。私の興味は、そんな文体の範囲と文体の実態を類型的に捉えることにあります。

III　文体を捉えるために

これまでの文体史研究では、先に述べた、和文体と漢文訓読体には言語上の差が存在することまでは具体的に明らかにされていますが、和文とはどこまでを指す概念なのか、和文資料の中でどのような差があるのかという点については明確な答えがありませんでした。そこで、多くの資料を対象として、和文の範疇やそれと連続する和漢混淆文の実態について類型的に示しました。同じような疑問は別の時代の文章にもあります。文語文と口語文の関係が分かりやすいでしょうか。こうした、歴史的な経緯によって分断された文章の文体的な位置づけについて検討し続けたいと思います。

情報科学部

山﨑 陽一
情報科学部
情報科学科　准教授

I　感性を科学する ～情報科学の視点からの感性の理解に向けた取組～

感性は、知的認識とは異なる独自の情報処理過程として位置づけられ、その構造理解は人間中心社会の基盤となります。とくに Society 5.0 では、多様な幸福（well-being）を実現する環境設計が求められておりヒトの感性を定量的に扱えるようになることがその実現の鍵になります。本研究室では、感性情報学の視点から、感性の精密計測、数理モデリング、さらに感性デジタルツインの構築に広く取り組んでいます。この取組は、感性価値やその個人差を科学的に扱う枠組みを提示することで、人間理解への知的貢献、より良い将来社会の実現への寄与が期待されます。

II　心理・生理・行動情報に基づいた感性計測

ヒトは自身の内的状態を心理・生理（脳波、心拍変動など）・行動など多様なモダリティにおける反応として表出しています。すなわち、これらの反応には感性に関する情報が含まれています。本研究室では、心理・生理・行動に関するマルチモーダルな反応データからヒトの感性を精密に捉えるための計測・分析方法の研究開発に取り組んでいます。一例として、撫でによる触感、飲料に対する嗜好、音に対する嗜好などの計測に取り組んできました。これらの方法論で計測される感性データは、今後の感性の理解における基盤情報となるものです。

III　感性の数理モデリングとデジタルツイン

本研究室では、神経科学、認知科学、感性情報学などの分野で蓄積されたヒトに関する知見に基づき、心理・生理・行動データを統合することで、感性を多層的に記述するモデルの研究開発に取り組んでいます。このモデルは、感性を形成する神経基盤の働きから、個人差として現れる反応特性までを説明するものです。実現には、数理モデリング、AI 技術、物理シミュレーションなど情報科学の方法論の横断的活用が不可欠です。最終的にはヒトの「感じるプロセス」そのものをデジタル空間に写し取った、すなわち感性のデジタルツインの実現を目指します。

教育福祉学部

金 碩浩
教育福祉学部
社会福祉学科　准教授

I　社会保障制度の政策効果分析：EBPMの追求

社会福祉学の規範性と経済学の合理性の調和を志向し、計量経済学を用いた社会保障制度の政策効果分析に従事しています。当為的な議論に傾斜しがちな政策評価に対し、厳密な因果推論に基づくエビデンス（EBPM）の提示を主眼としています。具体的には、高齢者介護保険や公的扶助等を対象に、労働市場との相互連関を視野に入れた分析を行っています。介護保険需要の価格弾力性、公的扶助の就労インセンティブ、最低賃金引上げの波及効果検証等がその例です。今後も高齢者と低所得者層への社会保障を核心に、実証的かつ政策的含意に富む研究を深めていきます。

II　貧困・格差・不平等の実態に関する重層的分析

統計資料の精緻な解析を通じ、マクロレベル（国家）の貧困・格差構造を解明し、それがミクロレベル（個人・家計）の生活にいかなる経路で影響を及ぼすか実証的に検証しています。この複眼的な視点が、当事者の生活実態に即した実効性ある政策提言を可能にします。高齢期の貧困経験が社会参加を媒介し主観的幸福感に与える影響分析や貧困問題における国家責任の再定立に関する考察等が代表例です。クロスセクション分析の限界を超えた動態分析を可能にすべく、パネルデータの構築にも注力しています。

III　社会構造の同質性に着目した日韓比較社会政策研究

日本と韓国は、産業構造の類似性のみならず、少子高齢化、家族機能の変容、格差拡大、地方の空洞化等の社会構造的課題において極めて高い同質性を有しています。両国の制度的・社会的共通項と相違点を比較社会政策的に分析し、参照可能な政策を模索しています。上記の研究領域においても日韓比較の視点を堅持していますが、近年は地域包括ケアシステムの構築課題や、多文化共生社会の実現に向けた政策的アプローチの国際共同研究を推進しており、学術的・実践的貢献を目指しています。

研究所・プロジェクトチーム活動報告

研究所・プロジェクトチーム
ウェブサイトはこちら

愛知県立大学 ICTテクノポリス研究所 THE POWER OF AICHI

所長／神谷 幸宏　情報科学部　教授

日韓水素シンポジウムを開催!

7月に、韓国の著名な研究者をお招きし、「日韓水素シンポジウム～水素経済の夜明け　日韓協力で築くグローカル・サプライチェーン～」を開催しました。県内の水素関係者が一堂に会し、とても有意義なシンポジウムとなりました。

あいち産業振興機構と「データ活用ハンズオン支援with愛知県立大学」事業を引き続き実施

昨年度に引き続き、あいち産業振興機構様と県内企業の生産管理システムに関する研究を行っています。県内企業様のご協力のもと、情報科学の知見を活かした新しい方式を開発中です。

次世代ロボット研究所

所長／村上 和人　情報科学部　教授

次世代ロボット研究所が目指すもの

人とロボットが共生・協調する社会の到来を見据え、人とロボット、あるいは、ロボットとロボットの自律的、協調的な動作の実現を目指しています。インタラクション関連技術、三次元センシング技術等の基盤的要素技術の研究開発を行い、第4次産業革命を支え、技術革新をリードする人材を育成しています。

アントレプレナーシップ教育プログラムの実施

科学技術振興機構（JST）から「EDGE-PRIME Initiative」を受託し、愛知県教育委員会、STATION Ai、世界的に活躍するロボット関連企業等と連携しながら高校生向けのアントレプレナーシップ教育プログラムを実施しています。また、中高教員向けにも「アントレプレナーシップ教育研修・体験会」を開催するなど、ロボット・AI分野の研究だけでなく、次世代を担う若手の人材育成も推進しています。

生涯発達研究所

所長／渡邉 眞依子　教育福祉学部　准教授

生涯にわたる発達の支援を目指して

乳幼児から高齢者まで人間の生涯にわたる発達の支援について、地域と結びついた分野横断的な共同研究の推進を図り、その成果や関係する情報を広く社会に発信することを目的としています。これまで愛知県における外国人高齢者支援、特別なニーズを持つ子ども・家族への支援や保育所での受け入れ体制について共同研究を進めてきました。2025年度からは子どもたちが安心して過ごせる探究的な学びの場の形成に向け、国内外の学校や地域福祉での特色ある取り組みについても調査研究を進めています。また、愛知県や名古屋市における学習・生活支援に関する調査、早期発達支援担当者の研修事業等を受託し、地域と連携した取り組みを行っています。

多文化共生研究所

所長／亀井 伸孝　外国語学部　教授

多文化共生社会の構築のための学際的研究

多文化共生社会の構築における様々な課題と可能性を多様な視点から研究しています。たとえば外国人住民と医療、福祉、教育、防災、人材育成や雇用などの問題や、情報保障手段のひとつとしてのコミュニティ通訳など、各所員の専門領域から研究を進めています。2024～2025年度は「博物館とポストコロニアリズム」をテーマに連続講演会を実施し、植民地主義や人種主義の横行とそれらに抗する思想や実践に関する共同研究を進めています。また、大学院生を含めた若手研究者の育成、研究発表機会づくりにも力を入れています。

人間の尊厳と平和のための 人文社会研究所

所長／中根 千絵　日本文化学部　教授

ますます重要性を増す喫緊の研究課題へ

研究所の名称に、拠って立つ理想と志を込めています。国際社会に起こっている目をおおう戦争の現実と地域に生きる個々の人々の生きる上での不安、これらの現実を目の当たりにする中で、この理想はますます重要性を増しているはずです。このことを核心に据えつつ、本学を起点とする地域の豊饒な文化を掘り下げ、歴史的時間軸と国際的空間軸を座標に、災害と文化・文化財、三遠南信地域文化、地方文芸、キリシタン文化についての各研究班によって堅実な学術蓄積を進めています。成果の一端は、年報『人文社会論叢』（本学学術リポジトリ）に収められているのでご覧ください。

文化財調査活用総合研究所 Institute for Cultural Property Research and Utilization

所長／小栗 宏次　情報科学部　教授

次世代の文化財活用を実践的に研究する中核的な存在となることを目指しています。

全国的に大学附置を含む文化財研究所の多くは、遺跡など埋蔵文化財の調査が主流で、建造物や古文書・芸術品を専門に扱う研究機関は必ずしも十分ではありません。本研究所は、愛知県立大学が強みとする「歴史文化」「情報科学」「地域連携」を活かし、次世代の文化財活用を実践的に研究する中核的な存在となることを目指しています。さらに、愛知県立芸術大学の文化財保存修復研究所と連携し、「保存」「修復」に加えて「調査」「活用」まで一体的に取り組むことで、全国的にも注目される研究拠点を目指します。

地域コミュニティにおける高齢者の介護予防・孤立防止を目的としたニューノーマルな時代の「遊び」開発プロジェクト

リーダー／奥田 隆史　情報科学部　教授

AIも嫉妬する無駄な『遊び』がある？という時代がやって来たヤァ！ヤァ！ヤァ！

通称「遊び」プロジェクトです。ポストコロナ時代における介護施設等での調査制約を踏まえ、現在は学びの要素も含む「若年期の広義の遊び」に焦点を当てています。テーマは「鬼ごっこ等の集団外遊び」、「おみくじの数理」等の伝統的な遊びから、「中高生へのプログラミング教育」、「大学生のアクティブラーニング」、「森林セラピー」、「農作業の心身への効果」、「リモートによる高齢者ICT支援」まで多岐にわたります。活動成果として、研究員の指導学生が昨年に続き2025年も情報処理学会全国大会にて表彰されました。また、あいちシルバーカレッジ専門コース（「地域で活用するIT」）にて研究成果を紹介するなど、社会還元にも努めています。

※所長名・職名は2025年度時点。

2025年度 科研費新規採択一覧／学長特別研究費一覧

■科研費新規採択一覧

課題番号	研究種目	部局名	職名	氏名	開始年度	終了年度	研究課題名
25K00757	基盤研究（B）	教育福祉学部	教授	山本 理絵	2025	2028	子どもの居場所を保障する学校モデルの実践的開発ー地域・福祉・保健との連携ー
25K03823	基盤研究（C）	日本文化学部	教授	宮崎 真素美	2025	2027	『現代詩手帖』を中心とする1970年代日本現代詩雑誌研究
25K03929	基盤研究（C）	外国語学部	准教授	小倉 悠輝	2025	2028	アメリカ現代詩における抒情詩概念の構築と変容に関する研究
25K04018	基盤研究（C）	外国語学部	名誉教授	工藤 貴正	2025	2027	台湾白色テロ期の外省籍知識人のアイデンティティ形成に見る日本体験とその文化文学
25K04316	基盤研究（C）	外国語学部	教授	池田 周	2025	2028	英語の「語の読み書き」習得に必要な音韻認識測定テスト開発と指導プログラム構築
25K04423	基盤研究（C）	日本文化学部	教授	上川 通夫	2025	2028	日本中世民衆仏教成立史論
25K04916	基盤研究（C）	外国語学部	教授	中田 晋自	2025	2028	フランス諸都市の市民参加制度（参加型予算）を通じた未成年者の政治参加に関する研究
25K05566	基盤研究（C）	教育福祉学部	名誉教授	堀尾 良弘	2025	2027	非行少年のいじめ被害経験が非行性に及ぼす影響ー更生・立ち直りのための援助者の役割
25K05594	基盤研究（C）	教育福祉学部	教授	渡邊 かおり	2025	2028	社会事業の運動史における戦争の影響に関する研究
25K07765	基盤研究（C）	情報科学部	教授	神谷 幸宏	2025	2027	低速回転機器の振動の低周波数成分解析による異常検出法の確立とデータベース作成
25K09315	基盤研究（C）	外国語学部	教授	西野 真由	2025	2028	農業分野の外国人労働力に関する実証研究ー技能実習生・高度人材を中心に
25K13967	基盤研究（C）	看護学部	教授	深田 順子	2025	2028	頭頸部がん患者におけるボディイメージの障害に対する看護プログラムの開発
25K14014	基盤研究（C）	看護学部	准教授	汲田 明美	2025	2028	若年発症型IBDにより外科的治療を受けたときのバリアと生活力の創発特性
25K14042	基盤研究（C）	看護学部	教授	神谷 摂子	2025	2029	助産師教育における宿泊型産後ケア教育プログラムの開発
25K14067	基盤研究（C）	教育福祉学部	准教授	森川 夏乃	2025	2028	心身症児に対する内受容感覚に焦点を当てた介入の検証
25K14117	基盤研究（C）	看護学部	講師	清水 いづみ	2025	2028	採血や点滴刺入等の侵襲的処置時における子どもの権利を擁護するケア提供ツールの開発
25K14222	基盤研究（C）	看護学部	准教授	池俣 志帆	2025	2028	地域高齢者のフレイル予防に向けたリラクセーションプログラムの実践・評価
25K16154	若手研究	日本文化学部	准教授	斎藤 慶子	2025	2028	日本におけるバレエ・リュス受容：薄井憲二のパースペクティブ
25K16307	若手研究	日本文化学部	講師	大川 孔明	2025	2027	位相語史に関する計量的研究
25K17004	若手研究	教育福祉学部	准教授	黒川 麻実	2025	2027	「語り継がれてきた」物語教材の変化から捉える国語教育思想の検討

※特別研究員奨励費を除く　※職名は2025年度時点

■学長特別研究費一覧

区分	所属	職名	氏名	研究の名称	グループ構成
科研費採択奨励研究	看護学部 看護学科	講師	籠 玲子	看護基礎教育の看護倫理教育の内容の検討 ―看護学生のモラルレジリエンスに注目して―	―
	教育福祉学部 社会福祉学科	准教授	大賀 有記	在宅高齢者ケアにあたる専門職者が死と生のケアに向き合うための スーパーバイザー養成	―
	外国語学部 ヨーロッパ学科	教授	谷口 智子	アニミズム再考―アマゾン先住民族の宗教的世界観と熱帯雨林保護の生存戦略	―
	看護学部 看護学科	講師	加藤 宏公	看護師の主体的な臨床判断のための 臨床行動分析を用いた支援プログラムの開発	―
	外国語学部 ヨーロッパ学科	准教授	渡会 環	ブラジルの高齢者介護の社会化にみられる 新たな「介護」認識と人間関係の分析	―
地域課題研究 テーマ:分野横断研究による医療通訳のより有効な活用	外国語学部 ヨーロッパ学科	准教授	吉田 理加	医療通訳ユーザートレーニングの重要性周知のためのアウトリーチ	【外国語学部】糸魚川美樹／【看護学部】服部淳子 【看護学部】大原良子／【看護学部】成定明彦 【外国語学部】リディア・サラ・カハ 【教養教育センター】エウニセ・スエナガ 【バルセロナ自治大学】ソフィア・ガルシア 【インドネシア教育大学】デウィ・クスリネ
地域課題研究 テーマ:多文化共生社会構築のための学際的な基礎研究	多文化共生研究所	教授	亀井 伸孝	多文化共生社会構築のための学際的な基礎研究: 世界大のリスクから等身大のリスクまでを射程に入れて	【外国語学部】谷口智子／【外国語学部】小池康弘 【外国語学部】糸魚川美樹／【外国語学部】吉田理加 【外国語学部】奥野良知／【教育福祉学部】山本かほり 【教育福祉学部】松宮朝／【教育福祉学部】金碩浩 【看護学部】片岡由美子
学部間連携・産学公連携研究	看護学部 看護学科	教授	黒川 景	低コスト加圧・伸展細胞培養システムの構築	【情報科学部】神谷幸宏
	教育福祉学部 教育発達学科	准教授	藤原 智也	STEAM教育時代における「芸術の創造性」に関する基盤的研究	【教育福祉学部】高橋範行 【教育福祉学部】瀬野由衣 【愛知県立芸術大学 美術学部】井手康人 【愛知県立芸術大学 美術学部】柴崎幸次 【愛知県立芸術大学 美術学部】阪野智啓
	外国語学部 中国学科	准教授	袁 暁今	中国語 風刺・諧謔文の翻訳研究	―
海外ジャーナル投稿助成	看護学部 看護学科	准教授	成定 明彦	Bathing-related accidents requiring ambulance dispatches in relation to age and ambient temperature in Nagoya, Japan: differences between detached houses and apartment buildings	―
長期学外研究	日本文化学部 国語国文学科	准教授	本橋 裕美	日本古典文学から構築する文学理論の総合的研究	―
	看護学部 看護学科	教授	片岡 由美子	医療系分野のナラティヴに関するナラトロジカル的分析と、 ナラティブ・メディスンの実践の実情についての研究	―

学術研究情報センター

研究推進局		
	ICTテクノポリス研究所	所長／神谷幸宏
	次世代ロボット研究所	所長／村上和人
	生涯発達研究所	所長／渡邉眞依子
	多文化共生研究所	所長／亀井伸孝
	人間の尊厳と平和のための人文社会研究所	所長／中根千絵
	文化財調査活用総合研究所	所長／小栗宏次
	地域コミュニティにおける高齢者の介護予防・孤立防止を目的としたニューノーマルな時代の「遊び」開発プロジェクト	リーダー／奥田隆史

研究所・プロジェクトチーム紹介動画

愛知県立大学研究推進局

愛知県立大学全学X

AICHI PREFECTURAL UNIVERSITY

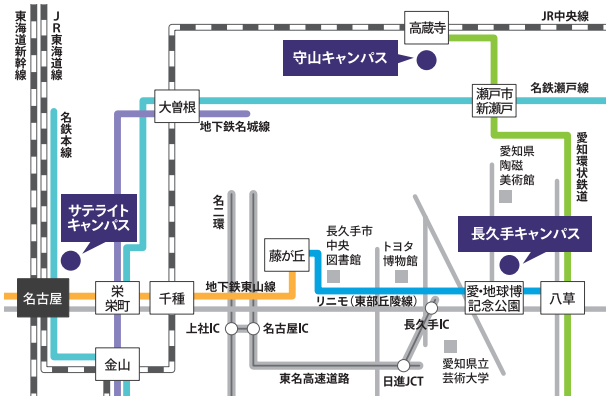
お問い合わせ

愛知県立大学 学術研究情報センター
https://www.bur.aichi-pu.ac.jp/gakujyo/
〒480-1198　愛知県長久手市茨ケ廻間1522番3
TEL 0561-76-8843
Eメール kenkyu@bur.aichi-pu.ac.jp

交通アクセス

■長久手キャンパス
リニモ「愛・地球博記念公園」駅下車 徒歩約3分

■守山キャンパス
JR中央線・愛知環状鉄道「高蔵寺」駅下車
スクールバス約8分



愛知県立大学研究活動報告　2026年2月6日発行　発行・編集／愛知県立大学　〒480-1198 愛知県長久手市茨ケ廻間1522番3 Tel0561-76-8843